The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高齢社会に対応したコミュニティ支援施設の整備に関する研究 ： 千里ニュータウンを対象として
Author(s)	張, 海燕
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45794
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	張（チョウ）　海（カイ）　燕（エン）
博士の専攻分野の名称	博　士（工　学）
学　位　記　番　号	第　１９５４０　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 工学研究科建築工学専攻
学　位　論　文　名	**高齢社会に対応したコミュニティ支援施設の整備に関する研究－千里ニュータウンを対象として－**
論文審査委員	（主査） 教　授　柏原　士郎 （副査） 教　授　阿部　浩和　　助教授　吉村　英祐

論文内容の要旨

日本では高齢化が急速に進んでいるが、ニュータウン（以下、NT）等の郊外住宅地においても高齢化は深刻な問題になっている。そうした課題の対策の一つとして、高齢者に対応するコミュニティ施設の整備がある。千里 NT において地域コミュニティ活動を支えるための施設としては、各近隣センターに計画されたコミュニティセンターに加えて、近隣センターの空き店舗や小学校の余裕教室の活用が進められている。筆者は、これらの施設がお互いに機能を補完しながら、有効に利用されるべきと考える。そこで、本研究は、①千里 NT のコミュニティセンターのうち三つを対象とし、それらの利用状況及び利用者による現状の評価と問題点を明らかにする　②千里 NT の空き店舗を利用している「ひがしまち街角広場」を対象として、利用実態と利用者の意識を明らかにし、高齢者のニーズを反映した千里 NT の近隣センターのコミュニティセンター施設の整備に必要な基礎資料を得ることを目的とする。

第一章「序論」では、研究の背景、意義と目的、関連する既往の研究、論文の構成、用語の定義などを述べた。

第二章「千里ニュータウンのコミュニティセンターの利用実態」では、未改築のセンターの老朽化や面積の狭さの問題のほか、便所、手すり、段差、エレベータなどのバリアフリーの問題が多く見出されるほか、空間が狭い、家具が重たいなどの問題があることも明らかにした。改築済みの津雲台市民ホールでは、一番利用しやすい。これは建物がバリアフリーの面は充実しているためであることも明らかにした。

第三章「コミュニティセンターの利用者の意識評価と要望」では、建物のサービス内容、立地条件、使いやすさ及び要望について、64 歳以下と 65 歳以上を比較した。未改築のセンターでは、バリアフリーに対する要望が多い。また各センターの交通手段別の割合は、徒歩が中心であるが、その割合はバス停の位置、バスの本数、鉄道駅までの距離、駐車場の充実度に左右される。バリアフリー化の程度を中心とするハード面のほか、管理運営上のソフト面も満足度に影響することなどを明らかにした。

第四章「千里ニュータウンのひがしまち街角広場の利用実態」では、１日当りの総利用人数は、月変動、曜日変動など利用実態を明らかにした。

第五章「千里ニュータウンのひがしまち街角広場の利用者の意識評価と要望」では、「皆が来られやすい雰囲気」と「若年層の利用」ことを望んでいる。またコーヒーの味をもう少し工夫することなどの意見があった。

第六章「結論」では、論文の内容をまとめた上で、今後千里 NT の近隣センターのコミュニティ支援施設の整備に

対する提案を行った。

論文審査の結果の要旨

日本では、高齢化が進んでいる郊外の千里ニュータウンに、地域コミュニティ施設の老朽化も顕在化している。特に高齢者を対応するコミュニティ支援施設の老朽化問題は一層顕著になっている。本論文は、高齢者のコミュニティ支援施設の利用状況と要望を知るため、最初計画されたコミュニティセンターと空き店舗を活用したひがしまち街角広場を対象として、アンケート調査とヒアリング調査を行って、現状把握・評価によるコミュニティ支援施設の満足度の要因を分析することにより、今後の施設整備の方向性を提案したものである。本研究の成果を要約すると次の通りである。

(1) コミュニティセンターの施設立地特性と利用状況等の文献調査と現地調査をもとに、施設の利用状況を影響される要因を明らかにしている。

(2) コミュニティセンターの利用者の意識評価を基づいて、施設の満足度を影響される立地条件、建物のハードとソフト面等の要因を明らかにしている。さらに65以上と64歳以下を比較し、満足度の要因等を分類している。

(3) 住民の要望を応じて生まれたひがしまち街角広場の役割を検討した結果、地域内の住民にとって、特に高齢者にとって、気軽に活動する場所であることを明らかにしている。また他地域の交流拠点になっていることも指摘されている。

(4) 街角広場の利用者とスタッフの意識評価による、コミュニティ支援施設の満足度に影響する各要因を明らかにしている。さらに、最初計画されたコミュニティセンターならびに小学校の余裕教室を活用したコミュニティルームの相互補完性を指摘している。

(5) 高齢社会に対応したコミュニティ支援施設整備の提案を行っている。新千里東町のように、相互補完施設の事例を拡大した上、地域の特性を配慮すべきである。

以上のように、本論文は現在の千里ニュータウンの問題ならびに利用者がコミュニティ支援施設の利用状況と評価を明らかにする過程において、今後のコミュニティ支援施設の再生の方向性を示唆したものとなっている。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。